



中年期の夫婦関係に子の離家と結婚コミットメント が及ぼす心理的影響

末広, 祐美

(Citation)

神戸大学発達・臨床心理学研究, 16:6-13

(Issue Date)

2017-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/E0041158>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041158>



中年期の夫婦関係に子の離家と結婚コミットメントが及ぼす心理的影響

Psychological Influence of Children's home-leaving and Marital Commitment on Midlife Marital Relationship

末広 祐美*
Yumi SUEHIRO*

要約: 本研究では、中年期の夫婦関係に子の離家というライフイベントが与える心理的影響を、夫婦関係の背景に存在する結婚コミットメントの観点から検討することを目的とし、大学生の子をもつ夫婦 248 名（妻 130 名、夫 118 名）を対象に質問紙調査を行った。結婚コミットメントの特徴により、親密性を重視する「愛情重視群」、親密性だけでなく夫婦関係の機能的・規範的側面も重視する「バランス群」、親密性の低い「諦め機能高群」の 3 群に分類した。この結婚コミットメントと、子の離家経験の有無を独立変数として夫婦関係満足度、夫婦の共同行動、子の離家を契機とする夫婦関係の変化、心理的 well-being について夫婦別に分散分析を行った。その結果、妻においては子が全員離家することにより夫婦の会話量や共有時間が増え、夫婦関係の変化を感じられること、「諦め機能高群」では、子と同居しているよりも子が全員離家しているほうが夫婦関係満足度が高いことが示された。また、心理的 well-being には子の離家経験よりも結婚コミットメントとの関連が多くみられた。一方で、夫においては夫婦関係満足度と結婚コミットメントとの関連のみにとどまり、子の離家経験は夫における夫婦の関係性認知に関連しないことが示され、子の離家というライフイベントの受け止め方や認知に夫婦間でズレが生じていることが明らかになった。

問題と目的

近年、日本の夫婦関係においては、結婚生活の質がより一層重要視されてきている。平均寿命の延びや、少子化・核家族化により、夫婦が子育てを終えて二人で過ごす期間は長期化し、どのようにして夫婦の関係を維持していくかが問題になっている。その一方で、日本の夫婦関係に関する研究では、夫婦間に様々な点で考え方や志向性のギャップが存在することが明らかにされてきた。特に、中年期の夫婦においてその傾向は著しく（柏木・平山, 2003）、中年期の夫婦における様々な問題が指摘されている。その夫婦間ギャップの代表的なものとして、夫婦の関係満足度が挙げられる（池田・伊藤・相良, 2005）。稲葉（2004）による大規模調査においても、結婚満足度は年齢層に関わらず一貫して妻より夫の満足度が高い。また、満足度は男女とも結婚後次第に低下し、高齢期に再上昇する U 字型となるという結果も示された（稲葉, 2004）。高齢期において満足度が回復することについては、単に満足度の低い夫婦が結婚年数の上昇につれて脱落していった結果とも考えられるが、中年期に向かって満足度が下がるという指摘は他の研究においてもみられる（菅原・小泉・訖摩・八木下・菅原, 1997）。その理由として、中年期の夫婦には関係を揺るがす様々なライフイベントが存在することが挙げられよう。子の自立による、これまで築いてきた家族構造の変化や、更年期や老いの始まりによる身体的変化、親の介護など、中年期は

従来の生活様式が維持できない危機的状況を発生しやすい（長津・濱田, 1999）。実際、人口動態統計（2013）においても離婚率における同居期間 20 年以上の夫婦の離婚率増加が指摘されており、中年期における夫婦関係の問題が示唆されている。

そのような中年期におけるライフイベントの中でも、子の自立は、夫婦関係を改めて問い直させる可能性をもつ重要な家族の節目である。わが国においては古くから子どもを大切にする「子宝思想」が強く、子どもが生まれると夫婦の役割よりも親役割が重要視される傾向がある（柏木, 2003）。それゆえ子の自立により、これまで親子関係を優先してきたため潜在化していた夫婦関係は顕在化され、夫婦関係は改めて問い直されるといわれてきた（長津・濱田, 1999）。同様に、岡堂（1986）によれば、家族の発達において中年期の夫婦は、子の自立を見守り、親子関係だけでなく夫婦関係を再調整することが求められるとされている。

その一方で、これまでの子の自立に関する研究では、主に子育て役割の減少による妻／母親への心理的影響に焦点が当てられてきた。例えば、子育てに打ち込んできた母親が、子の自立による対象喪失後に不適応状態に陥る「空の巣症候群」（後山, 2002）は、子の自立が与えるネガティブな影響として問題視された。それに対し、子の自立のポジティブな側面として、子の巣立ちを母親が認識することと関連して母親のアイデンティティは発達に向かうこと（清水、

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程前期課程

2004) も指摘されている。いずれにせよ、家族としてともに子の自立を見守る父親、そしてその相互作用による夫婦関係への心理的影響を検討した研究は少ない。北村・無藤 (2003) によれば、子の自立に直面した母親にとって、夫婦関係の良好さが母親の抑うつ傾向に影響を与えることが指摘されており、子の自立というライフイベントと夫婦関係の関連を示唆しているといえよう。

この子の自立を、ライフイベントとして家族ライフサイクルの視点からとらえると、「離家」というライフイベントとしての明確な転換点を考えることができる。「離家」とは、子が親元を離れ別の世帯として暮らすようになることを指し (国立社会保障・人口問題研究所, 2015), 人口問題研究や人口動態調査において使用されている用語である。わが国においては、夫婦関係の研究の中で、子との居住形態としての「同居/別居」が変数として扱われることがあっても、その間にある「家を出る」イベント (= 離家) に焦点が当てられた心理的研究はほとんど見当たらない。その一方で海外においては、子の離家は親の離婚のリスクを高くする影響をもつこと (Olga, 1998) や、ストレスフルな親役割を減少させ、結婚における生活満足度としての Well-being の増加に関連する (McLanahan, S., & Sorensen, A. B., 1984) という研究もみられる。これらの結果は、子の離家というライフイベントが中年期の夫婦関係に与える心理的影響を示唆しているといえよう。加えて、子の離家は、親役割の喪失という直接的な心理的影響だけでなく、親子の交流の減少に伴い夫婦の交流が増える、といった間接的な要因も考えられる。このように、子の離家というライフイベントは、親子関係だけでなく、夫婦関係にも変化を与えると考えられ、その心理的影響を検討する意義があるといえる。

その上で、今回は夫婦関係の継続の質をとらえる指標として、結婚コミットメントという概念を取り上げる。宇都宮 (2004) によれば、夫婦関係におけるコミットメントは、2 つのレベルから構成される。1 つは夫婦関係という構築したシステムの存続に照準を合わせたレベルであり、このレベルにおいては夫婦の親密性は絶対的ではなく、結婚生活を維持することによる機能的なメリットの認知が重要視される。もう 1 つは、パートナーとの親密性が結婚生活に必要なか否かというレベルであり、関係性の質に関わるものである。このレベルを重要視するものにとっては夫婦関係における親密性の欠如は耐え難いものであり、その場合、同一対象との関係の再構成を試みるか、結婚生活というシステムから離脱するか、もしくは前者のシステムの安定というレベルのみで適応を図ると考えられている (伊藤・相良, 2015)。この結婚コミットメントは、結婚生活の継続を説明する主要な概念として位置付けられ (Rusbult & Buunk, 1993), 変化が生じるときに関係を調整する能力であるとされている (Fields, 1983)。夫婦関係の適応性を測るものとしては、夫婦関係満足度も存在するが、これはある一時点における短期的な結婚生活への適応を示すものである。それに対し、コミットメントは結婚生活を続ける上での態度であり、長期的な適応性を反映するものである。このように、夫婦関係におけるコミットメントは中年期の夫婦関係という長期的な関係の質を測る上で重要な視点といえる。加えて、子の離家は子育てという夫婦の機能的側面の一つを喪失するライフイベントであることから、結婚コミットメントのシステムのレベルに影響を及ぼすものと考えられる。したがって、子が離家し

た後の夫婦関係の適応はコミットメントの様相により異なることが予想され、結婚コミットメントの観点から夫婦の関係性を検討する意義があるといえよう。

最後に、中年期以降の夫婦関係では、特に女性において、個人化 (個別化) 志向が高まる傾向が報告されており (伊藤・相良, 2010), 夫婦間だけでなく、個々で適応を図る傾向があると考えられる。また、子の離家が母親の不適応を起こしうるライフイベントであることもふまえると、中年期の夫婦関係をとらえる上で、個々の心理的適応についても合わせて考慮する必要があるといえる。

以上のことから、本研究では、中年期の夫婦関係に子の離家というライフイベントが与える心理的影響を検討することを目的とする。その上で、中年期の夫婦関係という長期的な関係を扱うため、夫婦関係の背景に存在する結婚コミットメントの観点から、夫婦関係満足度や共同行動といった夫婦の関係性に対する検討を行う。さらに、夫婦関係における適応だけでなく、夫と妻、個々の心理的適応を検討するため、心理的 well-being についても検討を加える。

方法

1. 調査期間

2015 年 12 月中旬から下旬であった。

2. 調査対象者と調査方法

年齢的に中年期に相当し、進学による子の離家を経験している夫婦や、子と同居し続けている夫婦がいると考えられる大学生の両親 299 名を対象とし、郵送法による質問紙調査を依頼、実施した。その後、妻 130 名、夫 118 名からの回答を得、分析を行った (有効回収率: 妻 43.5%, 夫 39.5%)。平均年齢は妻 51.55 歳 (42~66 歳, $SD = 4.01$), 夫 53.76 歳 (45~67 歳, $SD = 4.75$) であった。

3. 調査内容

1) フェイスシート

年齢、就業形態などの調査対象者の基本的属性に加え、子どもとの居住形態 (離家しているかどうか) をたずねた。なお、就業形態については調査対象者の回答しやすさを考慮し、妻では「専業主婦・パート/アルバイト・フルタイム勤務・その他」、夫では「会社員・自営業・パート/アルバイト・無職・その他」から回答を求めた。

2) 結婚コミットメント

夫婦関係におけるコミットメントを測定するため、伊藤・相良 (2015) の結婚コミットメント尺度を用いた。愛情と信頼に基づいた個人的なコミットメントである「人格的コミットメント」8 項目と、パートナーを道具的・機能的な存在と位置づけ、かつ関係に対する諦念がある「諦め・機能的コミットメント」8 項目、結婚および離婚を道徳的観念に基づいて考えるもので、かつ世間対など対社会的な側面をもつ「規範的コミットメント」7 項目の 3 因子、23 項目から構成されている。「1: 全く当てはまらない」~「5: とても当てはまる」の 5 件法で回答を求めた。

3) 夫婦関係満足度

夫婦関係を測定する尺度には、大別すると夫婦関係の諸側面を複合指標によって測定する尺度と、夫婦関係に対する総合的な評価を単一指標によって測定する尺度がある (柏木・平山, 2003)。本研究では夫婦関係に対する全般的な満足感を測定するため、単一指標に

よる尺度を用いた。“現在の夫婦関係に対する満足度”について「1：全く満足していない」～「10：たいへん満足している」の10段階で評価を求めた。

4) 夫婦の共同行動

伊藤・相良（2015）等で用いられている夫婦の共同行動に関する項目である、「買い物、外食、旅行、趣味・余暇活動」に、夫婦の関係性に共同で行う機会が左右されると考えられる「家事」を加え、“夫婦で一緒にする”程度を「1：ほとんどない」～「4：よくある」の4件法で回答を求めた。

5) 子の離家に伴う変化に関する項目

子の離家経験があると回答した夫婦にのみ、子の離家前後での夫婦関係の変化の認知や、行動面（会話量の増減、共有時間の増減）について、夫婦関係の変化の認知は「1：全くそう思わない」～「5：とてもそう思う」、夫婦の会話量の増減、共有時間の増減については「1：減った」～「5：増えた」の5件法で回答を求めた。なお、離家前の状況については、初めて子が離家する前の1年間の状況と現在の状況における変化をたずねた。

6) 心理的 well-being

心理的な適応感を測定するために、西田（2000）による心理的 well-being 尺度を用いた。「人格的成長」8項目、「人生における目的」8項目、「自律性」8項目、「自己受容」7項目、「環境制御力」6項目、「積極的な他者関係」6項目の計43項目から成るが、今回は調査対象者の負担を考慮し、因子負荷量が高く内容が平易な各3項目、計18項目を抽出した上、「1：全くあてはまらない」～「6：非常にあてはまる」の6件法で回答を求めた。

4. 倫理的配慮

倫理的配慮として、個人情報保護や調査協力は自由意思によるもので、断っても不利益を被らないこと、子の学業成績には関係しないこと等を書面で説明し、同意を得た。また、夫婦間のプライバシー保護のため、夫婦別々の封筒での返送を求めた。

結果と考察

1. 調査対象者の属性

まず、調査対象者の属性を以下に示す（Table1）。

Table1 調査対象者の属性：人数（%）

1. 対象者年齢					
	妻			夫	
40代	34	(26.2)		20	(16.9)
50代	90	(69.2)		82	(69.5)
60代	5	(3.8)		16	(13.6)
無回答	1	(.8)			
2. 職業					
	妻			夫	
専業主婦	33	(25.4)	会社員	77	(65.3)
パート／アルバイト	58	(44.6)	自営業	13	(11.0)
フルタイム勤務	29	(22.3)	パート／アルバイト	1	(8.0)
その他	9	(7.0)	無職	4	(3.4)
			その他	9	(18.3)

2. 結婚コミットメントの特徴による分類

なぜ結婚生活を継続しているか、という結婚コミットメントの様相の違いにより、子の離家が夫婦関係に与える影響も異なると考えられることから、結婚コミットメントの各因子得点を標準化し、階層的クラスタ分析（Ward法）を行った。抽出したデンドログラムおよび解釈可能性から3クラスタの構造を妥当と判断した（Figure1）。

抽出されたクラスタを独立変数として結婚コミットメントに対し1要因の分散分析を行った結果、3因子すべてに有意差がみられた（人格的コミットメント（ $F(2, 239) = 124.34, p < .001$ ）、諦め・機能的コミットメント（ $F(2, 239) = 80.74, p < .001$ ）、規範的コミットメント（ $F(2, 239) = 111.33, p < .001$ ）。多重比較（TukeyのHSD法）を行った結果、人格的コミットメントのクラスタⅠとⅡ、諦め・機能的コミットメントのクラスタⅡとⅢの間以外全てにおいて有意差がみられた（すべて $p < .001$ ）（Table2）。

以上より、クラスタⅠは、人格的コミットメントはクラスタⅡと同程度に高く、諦め・機能的コミットメントと規範的コミットメントが3クラスタ中最も低い。つまり、結婚生活を継続する上で、愛情と親密性に基づく人格的コミットメントを最も重視している群であるため、「愛情重視群」と命名する。クラスタⅡは、人格的コミットメントはクラスタⅠと同程度に高い一方で、諦め・機能的コミットメントもクラスタⅢと同程度に高く、規範的コミットメントは3クラスタ中最も高い。つまり、結婚生活を継続している理由に人格的コミットメントだけでなく、諦め・機能的、規範的コミットメントも必要としている、いわば現実的な群であり、「バランス群」と命名する。最後に、クラスタⅢは人格的コミットメントが3クラスタ中最も低く、諦め・機能的コミットメントはクラスタⅡと同程度に高く、規範的コミットメントは比較的低い。つまり、何らかの事情で結婚生活を継続している理由にパートナーとの人格的コミットメントを比較的に見出しづらく、他のコミットメントに頼っている群であり、「諦め機能高群」と命名する。

以上のように結婚コミットメントにより対象者を群分けし、以降の分析において用いることとする。

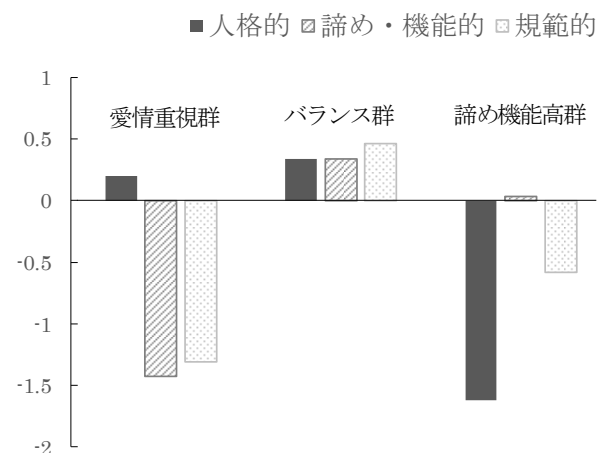


Figure1. 各クラスタ別にみた結婚コミットメントのz得点

Table2 クラスタ別にみた結婚コミットメントの平均値 (SD)

クラス	愛情重視 (<i>n</i> = 40)	バランス (<i>n</i> = 163)	諦め機能 (<i>n</i> = 39)	<i>F</i> 値	多重比較
人格的	4.02 (.44)	4.12 (.46)	2.74 (.66)	124.34 ***	I・II>III ***
諦め・ 機能的	1.56 (.45)	3.11 (.73)	2.84 (.73)	80.74 ***	I<II・III ***
規範的	1.51 (.35)	3.08 (.71)	2.15 (.59)	111.33 ***	II>III>I ***

p* < .05, *p* < .01, ****p* < .001

3. 子の離家経験と結婚コミットメントが夫婦関係に与える心理的影響の検討

以降の分析を行うに際し、現在、夫婦が何らかの理由で同居していない状態にある 11 名は除外した。なお、離家経験については、離家経験がなく子と同居し続けている状態を「同居群」、子のうち一人以上は離家の経験があるが、現在まだ同居している子がいる状態を「離家途中群」、子が全員離家し、別居している状態を「離家群」と定義する。また、子の離家に関する項目である、子の離家前後での夫婦関係の変化の認知（以下、変化の認知とする）、会話量の増減、共有時間の増減については、離家経験ありの群を回答の対象とするため、離家経験は「離家途中群」と「離家群」の 2 水準である。

以上をふまえ、子の離家経験と結婚コミットメントの様相が、夫婦関係に及ぼす影響を検討するため、子の離家に関する項目と夫婦関係満足度、夫婦の共同行動について、夫と妻に対し 2 要因の分散分析を行った。

1) 夫における夫婦の関係性の認知

夫については、夫婦関係満足度のみに結婚コミットメントの主効果がみられ ($F(2,103)=3.39, p<.05$), 多重比較 (Tukey の HSD 法) の結果、「愛情重視群」, 「バランス群」よりも「諦め機能高群」が有意に低かった ($p<.001, p<.05$) (Table3)。つまり、夫にとっては結婚コミットメントにおける人格的コミットメントの高さが重要であり、夫婦関係満足度の高さと関連することが示された。

以上の結果より、夫における子の離家経験と結婚コミットメントが夫婦関係に与える心理的影響について考察する。なお、「諦め機能高群」かつ同居群・離家群が非常に少ないサンプル数となっており、

解釈には注意が必要であるが、結婚コミットメントの特徴を表すものとして今回はこのまま考察を進める。

夫については、夫婦関係満足度の結婚コミットメントによる有意差だけがみられ、「愛情重視群」, 「バランス群」が「諦め機能高群」よりも夫婦関係満足度が高かった。人格的コミットメントは夫婦の愛情との相関が高く (伊藤・相良, 2015), 関係を維持する理由として愛情に支えられたコミットメントをもつ夫において、より夫婦関係満足度が高くなったと考えられる。一方で、子の離家経験による差はみられず、夫にとって、子と同居しているかどうかは夫婦関係満足度に影響をもちにくいことが示された。また、子の離家に関する項目には有意差はみられず、子と同居している夫も、子が全員離家した夫も、夫婦関係の変化を感じる程度に差はないことが示された。これについては、主要な子育ての担い手が妻である (国立社会保障・人口問題研究所, 2010) ことから、夫の子との関わりに費やす時間やエネルギーは、子が家にいても全員離家していても変わらず、結果として夫婦間の交流の変化も夫には同程度に感じられたことが推測される。

2) 妻における夫婦の関係性の認知

妻については、変化の認知に離家経験の主効果がみられ ($F(1, 85)=11.84, p<.01$), 離家途中群よりも離家群のほうが有意に高かった。会話量の増減では、離家経験と結婚コミットメントの両方に主効果がみられ ($F(1, 84)=19.27, p<.001, F(2, 84)=4.29, p<.05$), 離家経験の離家途中群よりも離家群が有意に高く、結婚コミットメントの「諦め機能高群」よりも「愛情重視群」が有意に高かった ($p<.01$)。共有時間の増減でも、離家経験と結婚コミットメントに主効果がみられ ($F(1, 84)=9.90, p<.001, F(2, 84)=5.99, p<.001$), 離家経験の離家途中群よりも離家群が有意に高く、結婚コミットメントは高い順に「愛情重視群」, 「バランス群」, 「諦め機能高群」であった ($p<.05$) (Table4)。つまり、妻において、子と同居しているよりも、全員が家を離れているほうが、夫婦間の会話量や一緒に過ごす時間の量は増え、夫婦関係も離家を契機としてより変化したと感じられていることが示された。加えて、人格的コミットメントだけが低い「愛情重視群」が、夫婦間の変化をより大きくとらえていることが示された。

Table3 夫における離家経験とクラスタ別にみた各尺度得点の平均値 (SD)

離家経験	同居			離家途中			離家			<i>F</i> 値			多重比較
	愛情重視 (<i>n</i> = 4)	バランス (<i>n</i> = 19)	諦め機能 (<i>n</i> = 1)	愛情重視 (<i>n</i> = 7)	バランス (<i>n</i> = 42)	諦め機能 (<i>n</i> = 10)	愛情重視 (<i>n</i> = 6)	バランス (<i>n</i> = 21)	諦め機能 (<i>n</i> = 2)	離家経験	結婚コミットメント	交互作用	
夫婦関係満足度	8.75 (1.89)	8.37 (1.12)	8.00	9.25 (.89)	8.21 (1.46)	6.70 (2.75)	8.33 (1.03)	8.15 (1.18)	6.00 (.00)	.96	3.39 *	.47	愛情・バランス>諦め機能
共同行動	2.70 (.62)	2.21 (.72)	1.80	2.36 (.71)	2.17 (.53)	1.91 (.51)	2.37 (.99)	2.48 (.58)	1.90 (.14)	.17	2.08	.55	
会話量の増減				3.63 (.92)	3.21 (.67)	3.00 (.67)	3.50 (.84)	3.62 (.74)	3.50 (.70)	1.22	.45	.81	
共有時間の増減				3.63 (.92)	3.14 (.64)	3.30 (.71)	3.67 (.52)	3.57 (.75)	3.50 (.71)	1.04	1.03	.50	
変化認知				3.13 (1.81)	2.42 (1.30)	2.80 (1.62)	2.17 (1.47)	3.14 (1.39)	2.50 (.71)	.15	.07	2.15	

※Table中の *n* は回答者の最大数を示し、尺度によって *n* は異なる場合がある**p* < .05, ***p* < .01, ****p* < .001

夫婦関係満足度では交互作用がみられたため ($F(4, 99) = 3.58, p < .01$), 単純主効果の検定を行った。その結果, 離家経験の同居群, 離家途中群のみに結婚コミットメントの単純主効果がみられ ($F(2, 99) = 13.28, p < .001, F(2, 99) = 13.82, p < .001$), 同居群, 離家途中群ともに「愛情重視群」, 「バランス群」よりも「諦め機能高群」が有意に低かった(すべて $p < .001$)。また, 結婚コミットメントの「諦め機能高群」のみに離家経験の単純主効果がみられ ($F(2, 99) = 6.21, p < .01$), 同居群より離家群が有意に高かった ($p < .01$)。共同行動でも交互作用がみられたため ($F(4, 110) = 2.71, p < .05$), 単純主効果の検定を行った。その結果, 離家経験の同居群, 離家途中群に結婚コミットメントの単純主効果がみられ ($F(2, 110) = 3.52, p < .05, F(2, 110) = 5.57, p < .05$), どちらも「諦め機能高群」より「愛情重視群」が有意に高かった (同居群: $p < .05$, 離家途中群: $p < .01$) (Table4)。つまり, 妻にとって, 人格的コミットメントが高いことが, 夫婦の関係性の良好さと関連していることが示された。一方でこの結婚コミットメントの様相と夫婦の関係性との関連は子と同居している妻のみにみられ, 子が家を離れると結婚コミットメントによる差はなくなり, 特に夫婦関係満足度においては, 子と同居している妻よりも子が全員離家している妻のほうが高いことが示された。

以上の結果より, 妻における子の離家経験と結婚コミットメントが夫婦関係に与える心理的影響について考察を行う。なお, 夫と同様, 「諦め機能高群」はサンプル数が少ないため解釈には注意が必要ではあるが, 結婚コミットメントの特徴を表すものとしてこのまま考察を行う。

まず, 子の離家に関する項目では, 子が離家する前後での夫婦関係の変化の認知, 会話量の増減, 共有時間の増減はすべて, 子と同居している離家途中群よりも子が全員離家した離家群のほうが得点が高かった。妻においては, 一人でも同居の子がいる場合は, 夫よりも子にエネルギーが注がれることが推測される。そのため, 子が全員離家すると, 夫婦の会話量・共有時間が増え, 結果として夫婦関係の変化も大きくなったと考えられる。子と同居する妻よりも子が離家している妻のほうが夫との会話量が多いという結果は, 子が自立すると共通の話題に乏しくなるという長津・濱田 (1999) の指摘とは異なるが, この結果は, 子が家を離れることにより, これまでの子との会話や過ごしていた時間が夫へと流れたことが理由だと

考えられる。

次に, 現在満足度, 共同行動はともに, 子と同居している妻には結婚コミットメントの様相が影響しているが, 全員が離家した夫婦の妻においては結婚コミットメントの影響は小さく, 特に「諦め機能高群」では, 子と同居しているよりも子が離家しているほうが夫婦関係満足度が高いという結果となった。このことから, 子の離家による妻の夫婦関係満足度へのポジティブな影響が示唆された。藪垣・渡辺・田川 (2015) の調査では, 妻における子どもの同居と夫婦関係満足度に弱い負のパスが確認されており, 本研究の結果も, この先行研究を支持するものとなった。一方で, 「諦め機能高群」が諦め・機能的コミットメントが高く, 夫婦関係への諦め感をもつことを考慮すると, 子が離家し子育ても一段落した状況で, パートナーとの親密性に対する諦め感が高まった可能性も否定できず, 今後より詳細な検討を必要とする。また, 共同行動についても, 夫婦関係満足度と同様, 離家群では結婚コミットメントによる差がみられなくなっている。これについては, 子が離家することによりそれまで子に向けていたエネルギーを, 夫に向けかえたことが考えられる。花形 (2009) では, 子が離家することにより時間的ゆとりを得たという妻の語りもみられており, 夫と一緒に行動する時間的精神的ゆとりを得た結果であると推測される。

4. 子の離家経験と結婚コミットメントが心理的well-beingに与える影響の検討

子の離家経験と結婚コミットメントの様相が, 個々の心理的適応に及ぼす影響を検討するため, 心理的 well-being について, 夫と妻それぞれに対し 2 要因の分散分析を行った。

1) 夫の心理的 well-being

夫については, 全ての因子において有意差はみられなかった (Table5)。つまり, 夫の心理的 well-being と, 結婚コミットメントの様相, 子の離家経験は関連しないことが示された。伊藤・相良・池田 (2014) によれば, 中年期の男性は職場での満足感が主観的幸福感への主要な源泉であり, 夫婦関係の満足感は副次的なものだという。今回の結果も先行研究と同様, 夫において夫婦関係が心理的 well-being に及ぼす影響は小さいことが示された。

Table4 妻における離家経験と結婚コミットメント別にみた各尺度得点の平均値 (SD)

離家経験	同居			離家途中			離家			F値			多重比較
	愛情重視 (n = 7)	バランス (n = 17)	諦め機能 (n = 4)	愛情重視 (n = 7)	バランス (n = 42)	諦め機能 (n = 16)	愛情重視 (n = 7)	バランス (n = 13)	諦め機能 (n = 6)	離家経験	結婚コミットメント	交互作用	
結婚コミットメント													
夫婦関係満足度	9.00 (.63)	7.63 (1.20)	3.33 (2.08)	8.86 (1.07)	7.62 (1.47)	5.39 (2.50)	7.71 (1.38)	8.15 (1.28)	7.17 (2.04)	2.02	20.51 ***	3.58 **	同居: 愛情・バランス > 諦め機能 離家途中: 愛情・バランス > 諦め機能 諦め機能: 同居 < 離家
共同行動	2.62 (.74)	2.16 (.70)	1.42 (.22)	2.74 (.74)	2.16 (.70)	1.68 (.77)	1.93 (.53)	2.64 (.83)	2.08 (.88)	.33	5.63 **	2.71 *	同居: 愛情 > 諦め機能 離家途中: 愛情 > 諦め機能
会話量の増減				3.29 (.49)	3.02 (.57)	2.69 (.60)	4.00 (1.00)	3.92 (.76)	3.33 (.82)	19.27 ***	4.29 *	.26	離家途中 < 離家 愛情 > 諦め機能
共有時間の増減				3.71 (.95)	3.07 (.65)	2.63 (.62)	4.00 (.82)	3.85 (.80)	3.33 (.82)	9.90 **	5.99 **	.61	離家途中 < 離家 愛情 > バランス > 諦め機能
変化認知				2.29 (1.11)	2.28 (1.24)	2.20 (1.15)	3.71 (1.38)	3.46 (1.45)	3.00 (1.00)	11.84 ***	.59	.19	離家途中 < 離家

※Table中のnは回答者の最大数を示し, 尺度によってnは異なる場合がある

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

2) 妻の心理的 well-being

妻については、自律性では結婚コミットメントの主効果がみられたため($F(2, 109) = 3.88, p < .05$)、多重比較 (Tukey の HSD 法) を行った結果、「愛情重視群」が「バランス群」よりも有意に高かった ($p < .05$)。積極的な他者関係でも結婚コミットメントの主効果がみられ ($F(2, 109) = 3.76, p < .05$)、「バランス群」が「諦め機能高群」よりも有意に高かった ($p < .05$)。また、環境制御力では交互作用がみられたため ($F(4, 109) = 3.92, p < .01$)、単純主効果の検定を行った。その結果、離家経験の同居群に単純主効果がみられ ($F(2, 109) = 7.90, p < .01$)、「愛情重視群」、「バランス群」よりも「諦め機能高群」が有意に低かった (ともに $p < .01$)。また、結婚コミットメントの「諦め機能高群」に単純主効果がみられ ($F(2, 109) = 7.29, p < .05$)、離家途中群、離家群よりも同居群が有意に低かった (ともに $p < .01$) (Table6)。つまり、妻にとって、自律性の高さには諦め・機能的、規範的コミットメントの低さが関連するといえよう。また、人格的コミットメントが高いだけではなく、諦め・機能的、規範的コミットメントも高い妻が、積極的な他者関係が高いことが示された。環境制御力については、子と同居していると低く、その中でも、結婚コミットメントの人格的コミットメントの低さと関連していることが示された。

以上の結果より、妻における子の離家経験と結婚コミットメント

が夫婦関係に与える影響について考察を行う。まず、自律性では「バランス群」よりも「愛情重視群」が高い傾向を示した。西田 (2000) によれば、自律性とは「自己決定力があり、自立している」、「ある一定の考えや行動を求める社会的抑圧に抵抗することができる」、「自分自身で行動を統制している」などと定義される。また、規範的コミットメントは、結婚生活を維持する理由として「離婚することで社会的な信用を失いたくないから」、「離婚することで、子どもに辛い思いをさせたくないから」といった、自分の意志とは異なる外的な要因を結婚生活維持の理由とする側面をもつ。「バランス群」は3群の中で最も規範的コミットメントが高い群であることから、自律性において、「愛情重視群」よりも低い値を示したと考えられる。

積極的な他者関係では、「諦め機能高群」が「バランス群」よりも低い傾向を示した。西田 (2000) によれば、積極的な他者関係は「暖かく、満足でき、信頼できる他者関係を築いている」、「他者に対する愛情、親密さを感じており、共感できる」などと定義される。また、伊藤・相良 (2015) によれば、この人格的コミットメントは親密性に基づくものであり、夫婦の愛情尺度とも高い相関を示すものである。「諦め機能高群」は3群の中で最も人格的コミットメントが低い群であることから、「諦め機能高群」は積極的な他者関係において、「バランス群」よりも低い値を示したと考えられる。

Table5 夫における離家経験と結婚コミットメント別にみた各尺度得点の平均値 (SD)

離家経験	同居			離家途中			離家			F値		
	愛情重視 (n = 4)	バランス (n = 19)	諦め機能 (n = 1)	愛情重視 (n = 7)	バランス (n = 42)	諦め機能 (n = 10)	愛情重視 (n = 6)	バランス (n = 21)	諦め機能 (n = 2)	離家経験	結婚コミットメント	交互作用
人格的成長	5.33 (.54)	4.56 (.60)	4.00	4.75 (.92)	4.51 (.83)	4.43 (.69)	4.50 (1.21)	4.89 (.69)	3.50 (.71)	.65	2.72	2.03
人生における目的	4.50 (1.00)	4.21 (.83)	4.00	3.79 (1.25)	3.99 (.81)	3.60 (.84)	3.94 (.53)	4.05 (.67)	3.83 (.24)	.89	.29	.22
自律性	4.42 (.74)	4.21 (.88)	4.33	4.88 (1.10)	4.13 (.80)	4.20 (.39)	4.39 (.71)	4.03 (.67)	4.67 (.71)	.04	2.27	.57
自己受容	4.67 (.72)	4.18 (.55)	3.67	4.08 (.87)	3.91 (.77)	3.73 (.83)	3.56 (1.00)	3.90 (.76)	4.17 (.71)	.39	.25	.93
環境制御	4.83 (.33)	3.93 (.81)	4.00	4.13 (.75)	4.12 (.64)	3.67 (.67)	3.72 (.88)	4.37 (.66)	3.67 (.94)	.58	.89	2.47
積極的な他者関係	4.58 (.42)	3.86 (.48)	3.00	3.71 (1.19)	3.77 (.68)	3.70 (.78)	3.78 (1.26)	3.89 (.67)	3.67 (.94)	.06	1.28	1.11

※Table中のnは回答者の最大数を示し、尺度によってnは異なる場合がある

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table6 妻における離家経験と結婚コミットメント別にみた各尺度得点の平均値 (SD)

離家経験	同居			離家途中			離家			F値			多重比較
	愛情重視 (n = 7)	バランス (n = 17)	諦め機能 (n = 4)	愛情重視 (n = 7)	バランス (n = 42)	諦め機能 (n = 16)	愛情重視 (n = 7)	バランス (n = 13)	諦め機能 (n = 6)	離家経験	結婚コミットメント	交互作用	
人格的成長	4.95 (.59)	4.59 (.71)	4.58 (1.03)	4.48 (.94)	4.80 (.67)	4.50 (.95)	5.14 (.84)	4.59 (.82)	4.61 (.71)	.46	.78	1.02	
人生における目的	4.33 (1.02)	4.04 (.90)	3.08 (1.29)	3.86 (.74)	3.98 (.96)	4.13 (.87)	3.90 (.81)	3.90 (.66)	3.44 (.66)	.59	1.86	1.47	
自律性	3.95 (.78)	3.59 (.68)	3.83 (.96)	4.48 (.79)	3.79 (.67)	4.19 (.60)	4.43 (.60)	4.03 (.79)	4.00 (.56)	2.06	3.88 *	.41	愛情>バランス
自己受容	3.90 (.83)	3.73 (.59)	3.17 (.79)	3.86 (.96)	3.88 (.87)	4.00 (.78)	3.71 (.97)	3.77 (1.18)	3.39 (.83)	1.22	.80	.64	
環境制御	4.24 (.37)	4.16 (.59)	2.75 (1.07)	4.38 (.62)	4.07 (.69)	4.15 (.82)	3.90 (.42)	3.77 (.66)	4.11 (.50)	3.70 *	2.95	3.92 **	同居：愛情・バランス>諦め機能 諦め機能：同居<離家途中・離家
積極的な他者関係	4.24 (.69)	4.04 (.81)	3.42 (1.07)	3.86 (.54)	4.36 (.79)	3.85 (1.02)	4.00 (.75)	4.26 (.78)	3.61 (.57)	.17	3.76 *	.61	バランス>諦め機能

※Table中のnは回答者の最大数を示し、尺度によってnは異なる場合がある

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

環境制御力については交互作用がみられ、同居群では結婚コミットメントの「諦め機能高群」が他の群よりも低い傾向を示した。井上・湯澤 (2002) によれば、夫からの好意や子への密着的爱おしさは、親としての人格的成長における「活力の増加」へとつながっているという。このことから、夫との親密性に基づく人格的コミットメントが低い「諦め機能高群」では、「自分の周囲にある機会を効果的に使っている」、「自分の必要性や価値にあった文脈を選んだり創造することができる」と定義される (西田, 2000) 環境制御力において、低い値を示したと考えられる。また、「諦め機能高群」では、同居群が子の離家経験をもつ他の 2 群よりも低い傾向を示した。「諦め機能高群」は、関係を維持する上で、「いまさら別の人とやり直すのは面倒だから」、「パートナーがいなくて経済的に成り立たないから」といった側面をもつ諦め・機能的コミットメントに支えられている群である。このことから、「諦め機能高群」の妻においては、子と同居し、まだ手を離れない状況では、自分自身の能力で環境に働きかけたり、創造性を発揮する機会や余裕が他の離家経験のある群よりも制限され、結果として環境制御力が低くなったと考えられる。

総合考察

本研究では、中年期の夫婦関係に、子の離家というライフイベントの経験が与える心理的影響について、結婚コミットメントの観点から検討を行った。その結果、特に妻において結婚コミットメントと離家経験による夫婦関係の差が示され、子の離家というライフイベントによる夫婦関係への心理的影響が示唆された。

中でも特徴的であったのは、妻において、子がまだ同居している状態では結婚コミットメントの影響を受けるが、子が離家した状態では結婚コミットメントの影響を受けず、人格的なコミットメントをみだせていない妻においては、子と同居しているよりも、全員離家しているほうが夫婦関係満足度が高まる傾向がみられたことである。また、子が全員離家しているほうが、夫婦の会話量・共有時間の増加を大きく認知し、その結果として、子の離家による夫婦関係の変化をより大きく認知している。以上の結果を考慮に入れると、子が離家することにより夫婦の関係性に変化が生じることで、人格的なコミットメントをみだせていない妻において、夫婦関係満足度が高まることが示唆された。「子はかすがい」という言葉があるように、子が親元を巣立つと夫婦関係は悪化するといわれることもある一方で、子が巣立つことで夫婦の時間が増え、夫婦関係にポジティブな影響をもつことが、本研究では示唆された。

また、妻の個としての心理的適応については、結婚コミットメントとの関連が示唆され、人格的コミットメントが高い妻のほうが自律性、積極的な他者関係といった心理的 well-being が高い傾向が示された。離家経験の違いによる影響は支持されず、子と同居しているかどうかよりも、夫婦の関係性のほうが心理的 well-being に影響をもつことが示された。

それに対し、夫においては、夫婦関係満足度への結婚コミットメントの影響がみられただけで、子の離家経験による夫婦関係満足度や夫婦の共同行動への影響はみられなかった。以上のことから、子の離家というライフイベントの心理的影響における夫婦間ギャップが見出され、子の離家の受け止め方や認知のズレから夫婦間の摩擦を生じるという、いわば夫婦関係の「危機」につながる可能性も考

えられる。宇都宮 (2004) によれば、夫婦人生の転換点を見出すことで、夫婦の関係性は発達していくという。子の離家を「同居/別居」の状態ではなく、ライフイベントという視点からとらえ、夫婦で意識的にこのライフイベントを迎えることで、夫婦の認知のズレを縮め、よりよい夫婦人生の後半に向けて関係を再構築していく準備ができるといえよう。

今後の課題としては、十分なサンプルサイズを収集できなかったことが挙げられる。特に夫における「諦め機能高群」のサンプル数は非常に少ない。これについては、結婚コミットメントの特徴として男性は女性に比べ人格的コミットメントが高い傾向があり (伊藤・相良, 2015)、人格的コミットメントが低い「諦め機能高群」が少なくなったこと、また、本研究の限界として、人格的コミットメントの低い、比較的關係性の悪い夫婦からの回答率が低いと考えられることが理由として挙げられる。また、子の離家前後の変化は回想法によるものであり、今後はサンプルサイズを増やしたうえで、子の離家前後の経過年数に配慮し、離家による夫婦の関係性の変化、心理的变化をより詳細に検討する必要があるだろう。また、今回は結婚後から現在まで関係が続いている夫婦を想定しており、ステップファミリーや離婚、再婚といった状況について検討できていないことや、子の離家に関しても U ターンなどの細かい条件を考慮できていないことが課題として挙げられ、今後より詳細な検討を加える必要があるといえる。

引用文献

- Fields, N.S. (1983). Satisfaction in long-term marriage, *Social Work*, 28, 37-41.
- 花形 美緒 (2009). 子供が家を離れた後の母親の生活変化について——イベントに対する変化とその対応についてのヒアリング調査を通して—— *Proceedings: 格差センシティブな人間発達科学の創成*, 8, 143-150.
- 池田 雅子・伊藤 裕子・相良 順子 (2005). 夫婦関係満足度に見るジェンダー差の分析——関係なぜ維持されるか—— *家族心理学研究*, 19, 116-127.
- 稲葉 昭英 (2004). 夫婦関係の発達の变化 渡辺 秀樹・稲葉 昭英・嶋崎 尚子 (編) 現代家族の構造と変容 東京大学出版会 pp.261-276.
- 井上 芳世子・湯澤 正通 (2002). 夫・子どもとの関係、対人態度が母親としての成長に及ぼす影響 *心理学研究*, 73, 431-436.
- 伊藤 裕子・相良 順子 (2010). 中年期から高齢期における夫婦の役割意識——個別化の視点から—— *文京学院大学人間学部研究紀要*, 12, 163-176.
- 伊藤 裕子・相良 順子・池田 政子 (2014). 既婚者の心理的健康に及ぼす結婚生活と職業生活の影響 *心理学研究*, 75, 435-441
- 伊藤 裕子・相良 順子 (2015). 結婚コミットメント尺度の作成——中高年期夫婦を対象に—— *心理学研究*, 86, 2-48.
- 柏木 恵子 (2003). 家族心理学——社会変動・発達・ジェンダーの視点—— 東京大学出版会
- 柏木 恵子・平山 順子 (2003). 結婚の“現実”と夫婦関係満足度との関連性——妻はなぜ不満か—— *心理学研究*, 74, 122-130.
- 北村 琴美・無藤 隆 (2003). 中年期女性が報告する娘との関係と心

- 理的適応との関連 心理学研究, 73, 9-18.
- 厚生労働省 (2013). 人口動態統計
- 国立社会保障・人口問題研究所 (編) (2010). 2008 年第 4 回全国家庭
動向調査
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2015). 2014 年社会保障・人口問題
基本調査 第 7 回世帯動態調査 結果の概要 (要旨)
- McLanahan, S., & Sorensen, A. B. (1984). LiFe Events and
Psychological Well-Being: A Reexamination of Theoretical
and Methodological Issues, *Social Science Research*, 13,
111-128.
- 長津 美代子・濱田 由紀子 (1999). 中年期における女性の夫婦間デ
ィストレス 日本家政学会誌, 50, 793-805.
- 西田 由紀子 (2000). 成人女性の多様なライフスタイルと心理的
well-being に関する研究 教育心理学研究, 48, 433-443.
- 岡堂 哲雄 (1986). 成人期のファミリープロセス 日本家族心理学
会 (編) ライフサイクルと家族の危機 家族心理学年報 4 金子
書房 pp. 29-39.
- Olga Suhomlinova, & Angela M. O'Rand (1998). Economic
Independence, Economic Status, and Empty Nest in Midlife
Marital Disruption, *Journal of Marriage and the Family*, 60,
219-231.
- Rusbult, C.E., & Buunk, B.P. (1993). Commitment processes in
close relationships: An interdependence analysis, *Journal of
Social and Personal Relationships*, 10, 175-204.
- 清水 紀子 (2004). 中年期の女性における子の巣立ちとアイデンテ
ィティ 発達心理学研究, 15, 52-64.
- 菅原 ますみ・小泉 知恵・詫摩 紀子・八木下 暁子・菅原 健介 (1997).
夫婦間の愛情関係に関する研究 (2) ——Marital Adjustment
Test との関連, 日本発達心理学会第 8 回大会論文集, p.58
- 後山 尚久 (2002). 成長した子供と母親との関係が女性の心身に与
える影響 ——空の巣症候群—— 日本女性心身医学会雑誌, 7,
192-197.
- 宇都宮 博 (2004). 高齢期の夫婦関係に関する発達心理学的研究
風間書房
- 藪垣 将・渡辺 美穂・田川 薫 (2015). 中年期における夫婦関係満
足度および諸変数の関連——多母集団同時分析による
JGSS-2006 の検討—— 家族心理学研究, 29, 51-63.

付記

本研究の一部は、日本教育心理学会第 58 回総会において、齊藤誠
一准教授との連名で発表いたしました。